インドネシア映画に映される国民的課題を分析
－父親の権威、宗教と暴力、歴史認識を問い直す－

概要

京都大学東南アジア地域研究研究所の西芳実准教授は、インドネシアでの地域研究などを経て、インドネシア映画を題材に、それらに映し出されるインドネシアの国民的課題について分析しました。

インドネシアでは、1998 年にスハルト大統領による開発独裁が終わって民主化が進められる中で、社会が抱える諸課題を克服して新生インドネシアを作ろうとしてきました。政治や経済に目が向けられがちですが、変化が大きな時代では、人々が、自分たちが置かれた状況をどのように認識し、それにどのように臨もうとしているかを捉えることが重要です。

インドネシアでは、民主化によるメディアの自由化に伴って映画制作が活況を呈し、映画は社会の課題や人々の希望が映されるメディアになりました。本研究では、民主化後のインドネシアで、父親の権威、宗教と暴力、歴史認識といった国民的課題が映画にどのように映されてきたかを明らかにしました。

インドネシアは、ASEAN 諸国の中心的な存在であり、アジアにおける日本の重要なパートナーです。本書は、インドネシアの人々の社会に対する夢と挑戦への理解を深めるとともに、同じような課題に直面している日本がそれらの課題にどう対応すればよいのかを考える手がかりになります。

本研究成果は、2021 年 12 月 26 日に、「夢見るインドネシア映画の挑戦」として初版が出版されました。

１．背景

新型コロナウイルス感染症の世界的流行は、私たちのコミュニケーションのあり方に大きな変化をもたらしています。社会的距離を置く暮らしは、コロナ後も当分続くでしょう。一方で、オンライン通信技術が目覚ましい発展を遂げ、リモートによるコミュニケーションが普及しています。以前ならば、一対一で音声のみ、タイムラグもあって通信費もかさんでいた国境を越えた通話は、いまや一度に複数の人が参加して、映像つきでタイムラグもなく、インターネット環境があればお金もほとんどかかりません。機械翻訳の精度が向上し、音声を自動認識してテキスト化する技術と組み合わせれば、外国語の会話やニュースについて大体の意味を理解することもできるようになりました。映像の中の表情や仕草を見ることで、相手の感情や意図も捉えやすくなっています。

このように、国境を越えた情報のやり取りがかつてないほどに容易になったことは、人と人を繋ぎ、考えや気持ちを伝えあえるようになるというメリットの一方で、文化の違いのため、そして翻訳の精度の限界によって思わぬ誤解を生じさせ、しかもその誤解が一瞬にして多くの人々の間に広まりうるという状況ももたらしています。リモート・コミュニケーションの時代においては、互いの文化に対する理解がますます重要になっており、文字情報だけでなく、表情や仕草、映像、物語に対する文化的な読み解きのリテラシーが求められています。

２．研究手法・成果

文化を異にする社会を理解するリテラシーを向上させるために、従来から行われてきたのがフィールド調査です。長期間、現地に住み込んで現地の言葉を身に着け、寝食をともにしながら現場で人々の様子を見聞きすることを通じて、人々の行動やその背景にある考え方に対する理解が深められてきました。

直接、現地に行くことが難しいときには、映像作品、とりわけ映画が異文化を理解する上での手がかりを与えてくれます。異文化理解のための映画というと、ドキュメンタリー映画がよく知られますが、ドキュメンタリーは、制作者が取り上げる問題を絞り込み、問いとメッセージを明解にした構成をとることが多く、メッセージを理解しやすい反面、映像を読み解き考える力を高めることに繋がりにくいという点があります。

それに対して、本書では、劇映画を主な分析の対象にしています。劇映画は恋愛、アクション、ホラーというように、ジャンルごとの型があり、そこにその社会の人々の考え方を反映した物語が織り込まれています。ある社会で制作された劇映画をたくさん見ることは、その社会で暮らす人々の考え方が物語や映像に織り込まれる際の特徴や仕組みを読み解くことであり、また、その社会が特定の課題に対する対応をどのように変化させてきたかを知ることに通じます。これは、異文化理解に通じるだけでなく、映像から人々の考えや思いを翻訳するための「文法」を手に入れることでもあります。

本書ではインドネシアの映画を取り上げました。インドネシアはアジアの国々の中でも日本に地理的に近く、経済や文化の交流が盛んで、日本と密接な関係にあります。成長著しい ASEAN 諸国の中心的な存在であり、アジアの中の日本のこれからを考える上で、重要なパートナーとして注目されている国です。

日本とインドネシアの大きな違いとして、インドネシアは多民族・多宗教の人々がまとまってどのように国をつくるかを経験してきた国であることがあります。インドネシアで映画制作は 100 年の歴史を持ち、現在では毎年 100 作品以上が制作され、そのうち十数本が 100 万人以上の観客を動員する一大産業になっています。本書では、インドネシア映画の中でもとりわけ 1998 年の民主化以降の映画をもとに、以下に見るような観点から、インドネシア社会の課題とそれへの対応を人々の考えや思いに焦点を当てて明らかにしています。

インドネシアは世界最大のイスラム教徒人口を抱える国です。イスラム教と言うと、神への信仰心を何より

も優先させると思われがちですが、インドネシアでは、イスラム教徒が多数派である一方で、イスラム教徒でない人々もいて、イスラム教徒とそうでない人々がともに社会を作ってきました。インドネシアの多宗教共生の現状を知ることは、今後のインドネシアとの関係を考えるヒントになります。

インドネシアには中華系の人々がいて、経済的な影響力が大きい一方で、移民として扱うのか、それとも国民の一部として受け入れるのかといった制度的な問題や、社会的な待遇をめぐる包摂と排除の問題が課題となってきました。

過去の戦争や政変では、国民どうしで殺しあう悲劇がありました。1945 年の独立革命、そして 1965 年 9 月 30 日事件以降の反共政策の過程で 100 万人以上が犠牲となり、社会の中に深い亀裂を残しています。こうした過去の悲劇を国として社会としてどのように受け止めるのか、また、亀裂をどのように修復するのかが問われ続けています。

経済成長とともに西洋的な価値観が流入して近代化が進む一方で、もともと社会の中にあった価値観とまじりあって、人々の規範意識も揺れ動いています。女性は家にいて良き妻・良き母になるべきという考え方に対して、女性は男性と同じように社会進出して活躍するべきだとする考え方による挑戦が見られるなど、特に女性の社会的地位や規範をめぐって、社会的合意をどのように形成するかが課題となっています。

３．波及効果、今後の予定

本書は、学術研究の成果としてだけでなく、インドネシアに馴染みの少ない一般読者にも読みやすくするための工夫が施されています（目次参照）。アジアの隣人について知るだけでなく、日本がアジアの中で隣人との関係を考えていく上でも、また、日本の内にある多様性をどのように受け止めるかを考える上でも、インドネシアの経験を理解することは役立ちます。

本書は、日本の読者に対してインドネシアの経験を紹介するものですが、ゆくゆくはインドネシアの人びとにも、インドネシア社会の経験は日本社会の課題と照らし合わせてどのように意義や価値を持っているかを紹介したいと考えています。本書をインドネシア語に翻訳して刊行することをめざすとともに、インドネシア語によるダイジェスト動画を配信し、SNS やオンライン通信を通じてインドネシアの人びとと意見交換をしていく予定です。

４．研究プロジェクトについて

本研究は下記の支援を受けて実施されました。

・科研費・基盤 B「インドネシアの災害後社会における生活再建と女性」（2014～2017 年度、代表：西芳実）

・科研費・基盤 B「東南アジア映画の物語と表現を読み解く―地域研究と映画史研究の連携」（2020～2023 年度、代表：山本博之）

・混成アジア映画研究会（2014 年～、http://yama.cseas.kyoto-u.ac.jp//film/index.html）

・京都シネアドボ「映画は他者の痛みを語れるか：夢みるインドネシア映画の挑戦」上映・トーク（http://yama.cseas.kyoto-u.ac.jp//film/event/20211016kyoto.html）

＜研究者のコメント＞

海外との往来が容易でなくなり、リモート・コミュニケーションに頼りがちないま、文学や映画を手掛かりにそこに託されている人々の思いや考えを想像する力がますます問われています。インドネシアの文学や映画はなかなか日本で紹介される機会がありませんが、近年は日本で視聴できる作品も増えています。映像・映画への理解にとどまらず、映画がつくられた社会の背景や文化・歴史、そしてそこで物語を紡ぐ人々への関心・理解を深める手がかりに本書がなればと願っています。

＜書籍タイトル、著者、目次＞

タイトル：夢みるインドネシア映画の挑戦

著者：西芳実

〈目次〉

第１部　序論　インドネシアの夢と願いを映画にみる――1998 年政変以降を中心に

　第１章　多彩なインドネシアを構成する民族と言語、風土と社会

　第２章　インドネシア映画史――1926 年～1998 年

　第３章　新生インドネシアの三つの挑戦を映画にみる

第２部　父をめぐる国民の物語の模索――映画にみるインドネシアの家族像

　第１章　父という厄介者を描く―― 1998 年スハルト退陣とリリ・リザ監督

　第２章　家族から父を消してみる――ニア・ディナタ監督の女家長による家づくり

　第３章　父亡きあとに父を受け入れ自立を目指す――三つの映画にみる父との向き合い方

　第４章　支えられ、やり直して父になる――ドラマと家族のリメイクにみる家族像の再編

第３部　信仰と規範、社会秩序の問い直し――呪縛と闘うインドネシア映画

　第１章　信仰が生む暴力と向き合う――バリ島爆弾テロ事件と宗教の不寛容

　第２章　信仰実践を世界に発信する――インドネシアは世界の手本になるか

　第３章　信仰のなかで生きる女の幸せを考える――ジャワ農村の束縛からどう逃れるか

　第４章　秩序を回復し家族を守る女を描く――闘う女たちのホラーと活劇

第４部　国民的悲劇を語り直し乗り越える――想像と連帯を促す映画の力

　第１章　「国民的悲劇」に向き合う――九月三〇日事件と「共産主義者狩り」の語り直し

　第２章　失踪と別離に寄り添う――革命と政変が招いた溝の深さ

　第３章　「受難の生」を受け止め生きる――インド洋津波と東ティモール紛争は国民的悲劇になるか

おわりに

資料

　監督紹介／インドネシア映画研究ガイド／インドネシア映画関連年譜／

　観客動員数が 100 万人を超えたインドネシア映画（1999 年～2019 年）

あとがき

参考・参照文献一覧

初版年月日：2021 年 12 月 26 日　　ISBN：978-4-909151-22-3　　出版社：英明企画編集